SAGA Design Crossing

これからの伝統工芸と作り手たち

主催：佐賀県　流通・貿易課

ものづくりの担い手　佐賀の未来語る

デザインの視点から佐賀県の未来像を探るシンポジウム「SAGA Design Crossing（さがデザインクロッシング）」が1月27日、佐賀市内の2カ所で開かれた。このうち、JR佐賀駅前の情報発信拠点「SAGAMADO（サガマド）」では、伝統工芸の若手職人らによるクロストークや講演があり、約50人が耳を傾けた。佐賀の強みであるものづくりの課題や可能性について出されたさまざまな意見・メッセージを紹介する。

（※文中は敬称略）

【基調講演】山田遊氏（バイヤー・株式会社メソッド代表）
【クロストーク】山口祥義氏（佐賀県知事）▽山田遊氏▽松本奈緒子氏（佐賀県窯業技術センター）▽畑石修嗣氏（鍋島焼窯元「畑萬陶苑」5代目）▽谷口弦氏（名尾手すき和紙7代目）▽司会＝佐々木理恵氏（ニュースキャスター・芸術工学修士）

【登壇者】

畑石 修嗣氏

山田 遊氏

谷口 弦氏

松本 奈緒子氏

山口 祥義氏

[司会]佐々木 理恵氏

クロストーク

◆デジタルで窯業支援◆

―きょうは佐賀の伝統工芸とデザインに焦点を当てて、皆さんに現状と未来を語っていただきます。まず、今回のシンポジムの会場でもあるサガマドについて、どのような思いで開設されたのか山口知事と山田さんにお聞きします。

山口　普通の観光案内所にしてしまったら面白くないという思いがありました。ここに来た人が「佐賀って結構奥が深いな。もっとほかのことも知りたいな」という気持ちになってもらえるような入口、人と人が交わる「人間交差点」になってほしいというイメージを伝えました。

山田　私はサガマドの立ち上げにプロデューサーとして携わらせていただいたんですが、2020年の開業時は新型コロナウイルスのまん延で観光案内どころではない状況でした。開業前は何をどうすればいいか、いろんなことを考えましたが、いざオープンしてみて実感したのは地元の人に本当によく支えてもらったということです。

サガマドでは諸富家具や名尾手すき和紙といった工芸品の展示をしていますが、やはり地元の方たちが工芸品や県産品の魅力を一番理解されていて、買ってくださる。見せ方を工夫すれば、その価値は当たり前にあるものじゃないということも十分に伝わることが分かりました。

―佐賀といえば真っ先に思い浮かぶのが焼き物ですが、歴史的にデザインとのかかわりはどうだったのでしょうか。

畑石　有田焼は1616年が発祥で、積み出し港の名から伊万里とも呼ばれていました。明治以降に輸送手段が船から陸上交通へ移るにつれ、有田の製品を有田焼、伊万里の製品を伊万里焼と区別するようになりました。一方、鍋島焼は大川内山（伊万里市）の鍋島藩直営の窯で将軍に献上する高級磁器を作っていたというのが始まりです。献上は1675年から廃藩置県がなされる明治初期まで続きました。

藩の献上品ですから、やはり作品のコンセプトや図柄を考え指揮をとるデザイナーやディレクターのような立場の人間がいたと思います。色も、染付（下絵付け）で使う青と、上絵付けの赤・緑・黄の計4色以内に収めるという基本的なルールがある。柄が異なっても統一感があるのが鍋島焼の特徴ですね。

―佐賀の焼き物は海外でも高く評価されています。窯業支援も重要ですね。

松本　私は佐賀県窯業技術センター（有田町）で働いています。県内で窯業にかかわる方々の技術支援を行う県の機関で、新しい素材や技術の開発、人材育成研修などを行っています。センターの成果の一例を挙げると、メタリック調のきらきらする絵具の開発があります。今まで焼き物ではそういう色が出せませんでしたが、新しく開発したことで県庁正面にある銘板にも使われました。世界最高レベルの強度を持つ磁器素材の開発もしました。

窯業はこれまで、職人が一つずつ手で作るということをしてきましたが、最近はその世界でいかにデジタル技術を活用するかという研究もしています。実際、産地では3Dデータによる設計などデジタル技術がかなり普及してきています。佐賀の窯業を守り残していくために、元からある伝統の技術を生かしながらいかに新しい技術を使うかという広い視点で支援をしていきたいと思っています。

畑石　近年はデジタルを上手に使わないと作れないものへのニーズも多くなってきたように感じます。われわれが取り組んでいる既製品を組み合わせた香水ボトルもそうです。焼き物は収縮するので収縮率を計算した上で原型を作っていく必要がありますが、それを踏まえてデザインをしていくと、かなり精巧に仕上げることができます。ただ、職人的な経験と技がより求められる場合もあるので、作るものによって何を重視するか選択をしていくことが大事だと思います。

◆横のつながり大切に◆

―名尾手すき和紙についても教えてください。

谷口　われわれ和紙づくりの業界も330年くらいは続いています。昔は、名尾に100軒くらい和紙屋があって、世帯数イコール和紙屋という時代もありましたが、今では私たちが最後の1軒になってしまいました。

先祖代々、神具や提灯（ちょうちん）などを手がけてきましたが、全国的に和紙屋が減っていることもあり、各地の伝統的な芸能や行事の道具、建物の修復などの仕事も増えてきていますね。

―2021年の豪雨で被災されているんですよね。

谷口　土石流と土砂崩れのダブルパンチで自宅も工房も被害を受けました。先祖から受け継いだ道具も随分流されて、半年くらいはとても再起できる状況ではなかったと思います。しかしたくさんの方に協力していただき、応援してくださる人たちの支えで工房も新しくすることができました。

能登半島地震後、輪島の友人と連絡を取りましたが、ものづくりの仲間はあのような状況の中でも前向きでパワフルでした。時間がかかるかもしれませんが、復興をとげた輪島はきっとすごいものを作り出すでしょうから、今後もずっと注目していきたいですし、支援も続けていこうと思います。

―横のつながりは本当に大事ですね。ものづくりを進化させる上でコラボレーションが注目されてきていますが、食材と器、料理人をつないで未来ある料理人の育成を図る「サガマリアージュ」は面白いですね。

山口　これは佐賀の農水産物、つまり食材と伝統的な器などの工芸品、それと料理人、この三者がマリアージュする（融合する）と佐賀県は、他にはない光を放つのではないかという発想ではじめました。年に2回くらいの頻度でイベントをやっていますが、毎回専門家・ジャーナリストの評判は上々です。

山田　この取り組みはかなり斬新だと思います。食材と器を1回で両方PRできる点でも、非常に効率がいいですよね。

畑石　作り手目線からすると、こちらの発想にはない器の使い方や盛り付け方をされる料理人さんもいらっしゃいます。同じ器でも料理人が違えばまた違う見え方になって、こちらとしても新しい発見があってそれが次の創作につながる。その関係性がすごく面白いと感じています。

谷口　私が作った和紙を使っていただいたこともあります。和紙の上に料理が載ることで自体あまりなかったことですが、載せてはいけないというルールや法律があるわけではないですし、革新的なことができたという思いはあります。

◆幸せの引き継ぎが鍵◆

―伝統工芸の世界では後継者不足も大きな課題です。

谷口　その家に生まれた以上、家業を絶対にやらなければいけない時代ではありませんが、工芸の場合は今後も子孫が継ぐのが主流ではあると思います。であればこそ、自分がやっていることに意味を感じたいというのは誰しも思うはず。最初は評価されないかもしれないけれど、まずは自分のものを作ることが「継ぐ」上で一番大事なことだと思います。

松本　陶磁器産地では後継者不足はかなり深刻な問題です。産地にはすばらしい技術があり、人材も育ってはいるのですが、やはり外にいる若い人が興味を持って「来たいな」「やってみたいな」と思ってもらえる取り組みをしていかなくてはなりません。

―佐賀がどんな方向へ歩んでいくのか今後が楽しみです。まちづくりや人々の暮らしを含め、どんなふうにしたい、あるいはなってほしいですか。

山田　そこに住んでいる人が楽しそうというのはとても大事な要素だと思います。豊かな地域には都市にないものが本当にたくさんある。それは私のように東京出身者から見たら憧れの対象ですし、実際にそういうとらえ方をされる時代になってきていますよね。

佐賀は各地域の多様性も含めて、基本的に幸福度が高い県だと思います。でも、自他ともに認められるためには、やはり地元の人たちが幸福度が高いと思って暮らしていかなければなりません。それは伝統工芸の世界も同じで、生産額や従事者のデータを見ると厳しい現状にありますが、それでも幸せそうに仕事をしていたら絶対に応援したくなるし、応援してもらえます。お金や経済だけでは測れない「幸せ」をどれだけ次の世代に引き継いでいけるかが地域として重要で、佐賀にはそのポテンシャルが十分にあると思っています。

山口　佐賀県は、47都道府県の中で人口密度の順位が16位。ほどよい具合に人がいる。また、県によっては県庁所在地に人口が集中していますが、佐賀県は佐賀市だけではなく鹿島にも鳥栖にも、唐津や伊万里にも、県内各地にまんべんなく人が住んでいる。そういう佐賀の特徴やそれぞれの地域にしかない価値を生かしながら、住んでいる人みんなでハッピーになるのがいいよね、という思いはあります。

また47都道府県で、デザインを政策の中心に置いているのは佐賀県だけだと思います。「さがデザイン」の取り組みは、生活や地域を心地よく豊かなものにするため、あらゆる課題解決にデザインの視点を取り入れようと始めましたが、山田さんのようなクリエーターやデザイナーが佐賀にどっぷり入って活躍してくれている。そういう人がますます増えてくれることを期待しています。

基調講演

挑戦し続けることが大事／地域資源と食の相性抜群

バイヤー・株式会社メソッド代表　山田 遊氏

日本の伝統工芸はいま、大変厳しい状況に置かれています。経済産業省などの資料によると、2020年の生産額は870億円。最盛期とされる1983年の5400億円と比較すると、16％ほどです。従事者数も20年は5万4千人で、ピークだった1979年の28万8千人と比べ18・8％まで減ってしまいました。

高齢化や過疎化などを背景に、各地の伝統工芸は後継者の確保に非常に苦しんでいます。佐賀県内でも、焼き物の里として知られる有田町など分業が進んだ産地では、窯元の下請け事業者の後継者不足が進んでいるのが現状です。伝統工芸は今のままでは成り立たず、変わっていかなければなりません。有田町の白磁の人間国宝、井上萬二さんは「伝統とは先人が築いてきたものを把握し、それを基に一歩先へ踏み出すこと」と言われています。また、太宰府天満宮（福岡県太宰府市）の西高辻信宏宮司は、あるインタビューで「私たちの仕事は駅伝の選手のように先祖から預かったものを次の代に渡すこと」と話されています。私はこうした方々の言葉から勇気をもらい、挑戦し続けなければいけないとの思いを強くしました。

伝統を守っていくことは大変で、変えることへの抵抗感もあるかもしれません。しかし、今できることに全力で挑戦し、変わることも含めてより良い形を作って後世に引き継ぐことが、今を生きるわれわれの責任なのだと思います。

佐賀は自然や食などに恵まれた本当に豊かな土地です。そして、伝統工芸品の原料となる地域資源と、暮らしの中にある食や飲み物との相性が抜群に良い。つまり佐賀の伝統工芸品は人々の生活に近い。それが大きな魅力だと思います。

今年の元日に発生した能登半島地震の被災状況をテレビで目の当たりにして、「明るい未来って何だろう」と考え、悩みました。漆器で有名な伝統工芸産地の輪島が壊滅的な被害を受けたこともショックでした。正直なところ、講演で何を話すべきか分からなくなってしまいました。

でも、そんなとき、佐賀県内のある事例を思い出しました。300年以上の歴史がある「名尾和紙」（佐賀市大和町）です。昔は100軒ほどあったそうですが、洋紙などに押され、今では県内で1軒だけが残っています。

その1軒も21年の豪雨で被災し、作業場が使えない状況になりました。ですが、昨年、元の工房から少し離れた場所に新しい工房を建てられ、その横にはお店も作ろうとされています。工房が使えなかった3年の間も、作品展を精力的にやってこられました。私が知ってほしいのは、どんなに苦しく厳しい状況に置かれても、そうやって挑み続けている人たちがいるということです。

伝統から学び挑戦を続けること、さらに仲間とつながって一緒に歩くこと、そして希望ある形で未来をつなぐ。このことを忘れずにいれば、佐賀の伝統工芸は必ず明るい未来へ歩むことができると信じています。

企画・制作／西日本新聞社メディアビジネス局

佐賀県　さがデザイン